

欽明朝に來日した百濟の醫師王有悛陀について

松木明知

1 はじめに

著者⁽¹⁾は、昭和四十一年以来、日本麻醉科学史の研究を続けているが、その成果は日本麻醉学会の準機関誌「麻醉」に、「麻醉科学史研究最近の知見」と題して連載中である。

「麻醉」⁽²⁾の概念は、日本在来の思想ではなく、外国から移入將來された思想であるから、本邦の麻醉科学史の草創を考慮する時には、この概念の伝播や麻醉薬の移入の問題が極めて肝要な事項であることは疑問の余地がない。

江上博士⁽³⁾は、その著「華佗と幻人」において、「麻醉」の医術は極めて西域的思想であり、三国時代の中国の医聖華佗は少なくとも、その麻醉法を西域を東漸して中国に至ったイラン系の幻人から伝授されたのではないかと提唱している。

しかも、最近伊藤義教⁽⁴⁾、井本英一⁽⁵⁾兩教授は古代、中世ベルシヤ語を駆使した言語学的立場から、「華佗」は中世ベルシヤ語で「先生」「医王」を意味する「Kwaday」または「Khwada」の対音とも考えられ、したがって華佗は中国人ではなくて、イラン系胡人ではなかったと述べている。

華佗が用いたとされる「麻」の麻醉作用は、華佗以前の中国では全く理解されておらず、この華佗イラン系胡人説は、前述した江上博士の論述を補強強化するものであり、さらに何故それまで全く中国に知られていなかった麻醉法が施行さ

れたのか、という疑問に対しても解決を与えるものである。

元来「麻」の麻酔作用はスキタイ文化圏、古代オリエント文化圏の人々、とりわけイラン人の幻人に知悉されていたという。

この幻人は東漸して中国に至ったので、しばしば中国の史書に披見されるが、前漢武帝の時、安息国（アルシヤク・パルティア王国）から大鳥の卵と黎軒（ラーク）の幻人が献じられたという「史記大宛伝」の記載を以って嚆矢とする。

幻人が自己の身体を支解する幻術を行ったことは夙に江上博士が指摘するところであり、これは麻酔と密接不可分であるという。

そうすれば少なくとも「麻酔」の思想を有していた幻人ないしイラン系胡人来日の有無は本邦の麻酔科学史上等閑に付してはならない問題であることは、容易に理解されることである。

2 日本へのイラン系胡人の来日

従来イラン系の胡人、とくに医師が来日したのは、天平八年（七三六）とする説があった。

すなわち「続日本記」⁽⁶⁾の天平八年の条に、唐僧道躋、波羅門僧菩提、唐人皇甫東朝と共に波斯人（ベルシヤ人）李密翳が来日したことが記述されている。

「李密翳」が誤って「李密醫」と誤写されたことから端を発して、「醫」の字が付くことから彼を「李密」という医師とする石原力の説が一時行われた。⁽⁷⁾

しかし「続日本記」の流布本「明暦本」の「醫」は「翳」の写し誤りであることや、職種を示す語を人名の下に付す例はないことなどによって、「李密」医師説は否定され、最近石原氏は楽人、鈴木氏は工房の技術者ではないかとしている。⁽⁸⁾⁽⁹⁾

なお伊藤義教授は「李密翳」を中世ペルシャ語 Rāmyār の写音であるとしている。⁽⁹⁾鈴木氏は、李姓が在唐中に初めて与えられたと考慮されるから、李密翳の三字全体を続けて本名の対訳と解すことは出来ないとしているが、これもおかしい。音が近似しているからこそ李姓を称したのであり、このことは戦後筆者の地方の金姓の朝鮮の人々がこれに最も近似している「今」姓に改めたことから、右に述べたことは容易に理解することが出来るのである。

在唐のペルシャ人すべてが李姓と称したのではないのである。

3、元興寺の建立とイラン系胡人技術者の来日

崇峻元年（五八八）奈良の元興寺、いわゆる飛鳥寺の建立に際して百濟から多くの技術者が来日した。⁽¹¹⁾

日本書紀同年の条によれば、派遣されて来たのは寺工太良未太、文賣子、鑓盤博士、将徳日味淳、瓦博士麻奈文奴、陽貴文・倭貴文・昔麻帝彌、畫工白加などであった。岩波大系本の注釈では、たんに工人であることより記されていない⁽¹²⁾が、伊藤教授や井本教授によれば、復原した原語に差異が見られるものの、この工人たちはいずれもイラン系胡人の技術者である点では意見が一致している。⁽¹³⁾

日本書紀によれば、これより時代が下るが、白雉五年（六五四）、⁽¹⁴⁾齋明三年（六五七）にそれぞれ筑紫と日向に異国人が漂着しているが、いずれもイラン系胡人を含むグループであり、⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾また天平勝平四年（七五二）に行われた東大寺大仏開眼伝要で用いられたと思われる伎楽面の作者の多くがイラン系胡人であったことは、伊藤教授の指摘するところである。⁽¹⁸⁾

このように往時、現在のわれわれが想像する以上にイラン系胡人の技術者が来日していたことは、従来ほとんど指摘されなかったことである。

4 王有峻陀の来日

崇峻天皇の元年（五八八）から天平時代にかけて、少くないイラン系胡人が来日していることは、彼らより早期に来日し、日本に関する情報を彼らに伝達したいわゆる先遣隊の存在を強く示唆する。

欽明天皇の十二年（五五二）百濟、新羅、任那の三国は高句麗と戦って漢城を占拠したが、同十三年（五五二）百濟は、新羅と高句麗の通知を疑い、わが国に救援を乞い、その翌年に軍兵の派遣を求めて来た。

日本書紀欽明天皇十四年（五五三）六月の条には左のように記されている。

六月に、内臣を遣して、百濟に使せしむ。伋りて良馬二匹・同般二隻・弓五十張・箭五十具を賜ふ。勅して云はく、「請す所の軍は、王の須めむ随ならむ」とのたまふ別に勅してたまはく、「醫博士・易博士・曆博士等、番に伝りて上ぎ下れ。今上伴の色の人は、正に相代らむ年月に当れり。還使に付けて相代らしむべし。又卜書・曆本・種種の藥物、付送れ」とのたまふ。

すなわちわが国は、百濟に軍事援助を与え、その見返りとして知識人の派遣を求めたのであった。これは以前に来日していた人たちがちょうど交代しなければならぬ時期に来ていたからでもあった。

わが国からの要請に応えて、百濟は、⁽²¹⁾翌十五年（五五四）五経博士の王柳貴を馬丁安に、僧曇慧ら九人を僧道深ら七人と交代させ、さらに易博士施徳王道良、曆博士固徳王保孫・醫博士奈率王有峻陀・採薬師施徳幡量豊・固徳丁有陀・楽人施徳三斤・季徳己麻次・李徳進奴・対徳進陀を派遣して来たのである。

人名の上の施徳、固徳は百濟の十六品位階⁽²²⁾を示す語である。施徳は第八品、固徳は第九品、奈率は第六品、季徳は第十品、対徳は第十一品である。

この人達の氏名は、朝鮮側の史料「三国史記」⁽²⁴⁾や「三国遺事」⁽²³⁾に披見されない。

さてこの中で醫博士の王有悛陀は、朝鮮系姓名として少し異様に響き、朝鮮、中国以外の国の人ではないかと考えられた。

当時、中国には多数のイラン系の胡人が居留していたことを併せ考えると、この異様に響く人名もあるいは、中世ペルシャ語で解読可能かも知れないと考え、この方面の第一人者である伊藤義教先生に解読を御願いした。

伊藤先生から早速返事を戴いたが、王有悛陀は、歴然とした中世ペルシャ語人名で「ワイ・ヤーリード (Way-yarid)」または「ワイ・ヤーリード (Way-yarid)」の写音であろうという。

「ワイ」はアヴェスター語「ワユ (Vayu)」の転化で、別形は「ワータ (Vata)」である。

本来は風神であるが、生・死の神をも意味する。この神格は、実証史料中にも見出しされる。

「ワータ・フラダート (Wahradad)」(ワータによって助長されているものの謂い) という実在の王名があり、サーサン朝時代では「ワイ・ボークト (Way-bokht)」という「ワイ」によって救われたものを意味する実在のゾロアスター教の聖職者の人名がある。

「王有悛陀」の場合「ワイ」を発音の似ている既存の「王」に引き充てたものである。

⁽²⁵⁾ 伊藤博士によれば、このように近似した音の漢字で写音したとするには、好個の類例があるという。

景教を中国に伝えた阿羅本の「阿」姓は中世ペルシャ語の *anos* (不死の) の略写音であるが、敢えてこの「阿」をとったのは、彼が中国人を装い、かつ仏教圏に出来るだけ抵抗を少なくして入国したいなどの用意もあっただろうという。

⁽²⁶⁾ 百済が中国の江南地方と密接な交流があったことは、インドの僧摩羅難陀によって東晉から仏教が伝来されたことでも明らかで、高句麗、新羅と比較しても中国の南朝との交渉が盛んであった。この江南地方には早い時代からイラン系胡人、⁽²⁷⁾ アラビア人の商人たちが進出していたこともまた指摘されている。

飛鳥寺の造営にたずさわったイラン系胡人の技術者達は、おそらく江南地方から百済へ渡った人達ないしはその子孫と

考えられ、そうすれば王有倭陀もそのような経路をとって百済に至ったイラン系胡人か、その子孫と考えられる。

彼が日本でどのような仕事を行ったか、何時帰国したのかなどについては、全く知る手懸りもないが、日本の医師たちがもっていない新しい情報を伝えたに違いない。

ゾロアスター教徒であったとすれば、宗教的儀式という点からあるいは「ハオマ」を作るのに必須な「麻」を伝えたのかも知れない。採薬師を同伴していることも、この意味においてきわめて肝要な事実である。

5、おわりに

欽明天皇の十五年（五五四）百済は、わが国の要請に依えて、易博士、曆博士、医博士、採薬師、楽人などを派遣してきた。

その中の醫博士、王有倭陀は、言語学的に、中世ペルシャ語のワイ・ヤーリード、またはワイ・ヤーリードの写音であると考えられる。つまり王有倭陀は百済に寄留していたイラン系胡人かその子孫であることが強く示唆される。しかし彼の日本における活動について全く知る手懸りは遺されていない。

文 献

- (1) 松木明知 麻醉科学史研究最近の知見（一〇二一）「麻醉」連載中
- (2) 松木明知 「麻醉科学史研究」二十一「麻醉」の語史学的研究「麻醉」三三、一〇二、一九八三
- (3) 江上波夫 「華佗と幻人」石田博士頌寿記念東洋史論叢 昭和四十年所収
- (4) 伊藤義教 ペルシャ文化渡来考 岩波書店 一九八〇年 五七頁
- (5) 井本英一 古代の日本とイラン 学生社 昭和五十五年 一一頁
- (6) 続日本記 新訂増補 国史大系 吉川弘文信 昭和五十六年（前篇）一四一頁
- (7) 石原力 奈良時代に来日したペルシャ人李密翳（李密）考 東アジア古代文化 十七号 一九七八年十月号

- (8) 石原力 天平期に来日したベルシャ人医師 歴史と人物 一九八〇年十月号
- (9) 鈴木靖民 ベルシャ人李密翳をめぐる臆説 国学院雑誌 八十一卷十二号 昭和五十五年十二月
- (10) 前掲書(4) 二八頁
- (11) 日本書紀(下) 日本古典文学大系 岩波書店 昭和四十年 一六八頁
- (12) 前掲(4) 四八〜六八頁
- (13) 前掲(5) 九〜一四頁
- (14) 前掲(1) 三二二および三三〇頁
- (15) 前掲(4) 一〜二二頁
- (16) 伊藤義教 日本書紀に書かれたトカラ人―「遠阿・舎衛女・墮羅女考」塗屋裏へ批判にも答えて―東アジアの古代文化 二十
五号 一九八〇年十月
- (17) 前掲(5) 一五〜一六頁
- (18) 伊藤義教 イラン語人名より―『日本書紀にみうる「遠阿(墮羅)」の場合』東アジアの古代文化 二十九号 一九八一年十月
- (19) 伊藤義教 イラン系胡人の来日 明日香風 第一卷第二号 一九八二年二月
- (20) 前掲(1) 一〇四頁
- (21) 前掲(1) 一〇八〜一〇九頁
- (22) 前掲(1) 六一七頁
- (23) 金富賦(金思燁記) 三国史記(上・下) 六興出版 昭和五十六年
- (24) 一然(金思燁記) 三国遺事(全) 六興出版 昭和五十五年
- (25) 伊藤義教 ソロアスターの研究 岩波書店 一九八〇年 三〇〇〜三〇三頁
- (26) 田村円澄 百済仏教史序説 田村円澄 黄寿永 百済文化と飛鳥文化所収 吉川弘文館 昭和五十三年
- (27) 杉山二郎 正倉院(増訂版) 瑠璃書房 昭和五十五年 一七五〜一七六頁

(弘前大学医学部麻酔科)

Arrival of the Iranian Physiçiān, Way-yārid in Japan in 554 A.D.

by

Akitomo MATSUKI

As the Kudara country was at war with the neighboring countries of Shiragi and Kohkuri around 550 A.D., she asked for financial and military aid from Japan in 553 A.D.. In response to this request, Japan helped her with the sending of two chargers, two ships, bows and arrows.

In return for Japanese support, the government of Kudara dispatched a group of scholars and musicians.

Among the scholars, a physician named Oh-yu-ryo-da in Japanese was included. This name sounds strange as Korean or Chinese, suggesting that he might have come from some other country than Korea and China.

Prof. G. Ito of Kyoto University, decoded his name linguistically as “Way-yārid” or “Way-āyārid” in middle Persian, which means man helped by Way. “Way” is the god of life, death and wind.

Unfortunately, the detailed information of him including the correct dates of arrival and leaving, duration of stay and medical activities, but he is the very first recorded Iranian physician to arrive in this country.

This fact suggests the possibility that he might have brought hemp as medicine into Japan.